

時事新報の社説 國會の前途

國會目出度開設したれども其前途の安否如何は世人の共に關心する所にして殊に外國人の如きは此一舉の首尾不善尾を以て我國の輕重をトゼントする者さへある。此時に當り時事新報は國會の前途と題し我國會は明治二十三年に開くと雖も其素因は遠く數百年前特に徳川政府治世の時に胚胎し維新的初に發育して今日に成長したものにて前途の望圓滿なりとの次第を歴史に照らし事實に従し丁寧反撃論說して數日間の社説と爲し来る十日より紙上に掲載して讀者の高評を乞ふ可し。

帝國國會開院の日 時事新報記者

時事新報定價

時事新報一年三百六十五日一日モ休刊セス其代價
逕送料廣告料ヘ左ノ如シ
一枚三錢○一箇月前金五十錢○三箇月前金五十錢○六箇月前金三十
○一箇年前金六錢
○時事新報社モ直接ニ郵便ニテ送送スルモノニ限リ右定額ノ外
兩月十五錢ノ郵送料申受

時事新報廣告料前金

一行五字活字廿四字詰 一日限 六日迄 二日以上

七日以上

月曜日并に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月前金八錢にして地方に郵送する分は此外に郵便の實費と申受可し。

時事新報

總理大臣の演説

昨六日山縣總理大臣が衆議院に出席して施政の方針を演説したる其旨意は本紙の雜報欄内に見ゆる所の如し議會開設の始めに際し内閣と衆議院との對面なれば如何なる事を述べ、やとて世間の待設け様々ありしに爲めに陸海軍の擴張と努力べしと云ふに過ぎずして施政の方針には相違あけれども政務の時事に緊切して直ちに人心に中るものに非ざれば之を國勢の大體論と云ふの外あきが如し如何とされば此等の事は明治の初年に於て演説するも可なり明治十年前後にも不可なるふとなく乃至二十三年の今日にも同様にして開國以來年として此演説を妨ぐるの年なればあり左れば昨日の演説は殆んど無益なるに似たれども其漠然として些の病なれば今世界の事情に照して最も宜しきを得たるものあらん歎蓋し國內大小の政治家がふのく相分立して居る所をく政黨の組織未だ其形を成さずして紛糾を繕着せざるふと今日の如き時運に際し若しも目前直接の事項に論及して取捨去就を明確するときは其演説より又他の事情を離れて徒らに統一の方向を勵揚するに足るるべきのみ得策に非るが如し今夫れ議會の開設を見て是非とも之に萬能の府たらんふとを望み政府も共に、提携して國務の整頓と一時に急がんとするに於ては總理大臣の演説も更に歩を進めて實際に深入し一切の方針を暴露すべきであるが我輩は決して此の一時の整頓を望まず毎々折に觸れて陳べたる如く議會開設を期より當分の間は唯その難形を遣くる事として貢て實効を零るに及び乍爾異同機にて身を守りと云ふ者あれば國會の成長發達したる後は其の角も夫れ迄の所は總理大臣の演説ありとて西洋諸國の事例に倣ふは無用なるのみ同じく儀式に止まる可

衆議院に於ける山縣總理大臣の演説

昨日衆議院に於ける山縣總理大臣并に松方大藏大臣演

述の本意は取敢へず號外を以て府下并に横濱の讀者に報道せしむが更に本日の紙上に再録するふと左の如し

其歲出總計へ

八千三百七萬五千餘圓

トス

之ヲ前年度即ナ二十三年度ノ總豫算ニ比較スレハ歲入ニ至

百九十五萬六千餘圓

チ減シ歲出ニ在アヘ

八千三百十一萬四千餘圓

トス

其歲出總計へ

八千三百七萬五千餘圓

チ減シ差引歲入ノ超過高

トス

五百二十一萬餘圓

トス

之ヲ二十四年度ヨリ向フ五箇年間ニ支出シ鐵道建設費ヘ

二百五十萬圓

トス

之ヲ二十四年度ニ至

五百八十九萬餘圓

トス

之ヲ二十四年度中ニ支出スルノ計算ニシテ合計

七百八十九萬餘圓

トス

之ヲ二十四年度ニ至

五百八十九萬餘圓

トス

之ヲ二十四年度ニ至

</